

Letters of the

SHELLEY COLLECTION

Number 3 February 1989

The Bunkyo University Koshigaya Library

いつの頃からかシェリーの目で物事を見るようになってしまった。新聞に目を通して見てシェリーと同じ考え方を示す報道に出くわすと、すべてをふるいにかける「時」が与えたお墨付きにすっかり自信を得て、何が「効なき天使 (a beautiful and ineffectual angel)」なものかと思わず口にしてしまう。ここ数年間にわたるそうした記事のいくつかを紹介して、シェリーの汚名をいささかなりとも挽回したい。

シェリーと政治、と言えばアイルランド運動である。アイルランドの一般大衆がこうむっている不法で、悲惨な隷属状態が、人間の権利の獲得と人類の自由、幸福、平和を切望してやまないシェリーをアイルランドへと駆り立てた。

シェリーのアイルランド運動に於ける救済理論の骨子は「自己変革」である。現状の改善とは、全人類の当然の権利である自由、幸福、平和がより等しく一般に行き渡ることである。そのためには、一人一人が「美徳」と「英知」を磨いて賢明、善良になって何が真理で、何が正義であるかを見極め、その真理と正義によって力と抑圧が間違いであることを認識して、暴力によるのではなく、理性と言葉を用いて諸悪の壊滅へと常に努力していかねばならないとする。「自己変革」の頂点としてシェリーがアイルランド人に望んだことは、彼らの気性の激しさを压制者たちが持

浦壁寿子

効なき天使



ち合わせない穏健（柔和）さに転じ、圧制者たちが示すことを拒んでいる無限の寛容と無限の人類愛を身につけてもらいたいということであった。

「美德」を磨くものは、節制、禁酒、思いやり、独立心である。「英知」を磨くものは、読書、話し合い、思考、探究心である。では具体的にどういうふうにしてそれらを磨くのか。

「美德」に根差した生活とは、一日を、一時間を、一秒をも無駄にしない。酒を飲まない。賭事をしない。これまで通り公私の務めや必要な労働に精を出す。その合間に時間を上手に使う、他の人々や自分自身に真に役立つことをする。妻や子供がなしで済ませられるものがあれば、苦しむ同胞のために役立つ。嘘をつかない。思いやりと節制を行動の特徴とする。喧嘩をしないで心をつなげる。暴力とのあらゆる結び付きを断ち、平静に、柔和に、思慮深く、辛抱強くする。

「英知」に根差した生活とは、真理と正義と自由の大義に真に役立ちたいと願って考え、本を読み、仲間と話し合う。直ぐにでも考えねばならない問題は政府を相手としたもので、他国との戦争の必要性、議会でのアイルランド代表の在り方、出版の自由についてである。こうした諸問題の解決のために望むなら連れ立って集まってもよいが、決して暴徒とならないこと。子供たちには揺籠の中にいる時から回らぬ舌で自由について語らせる。死の床についても家族の者たちへの諭しを続ける。国中を自由の聖なる思いで一杯にする。

現状の改善を中途半端に終わらせることなく、究極的、徹底の実現へと向かわしめるために、一日も早く「節制」「規則正しさ」「思考」を習慣づけ、断固とした決意で知的抵抗に訴えていくようにと力説している。シェリーは彼の説く内容が空想的だとか、革命的だとか言われることを極度に恐れて、そうしたことへの言及を随所に織り込みながら論を進

めている。この救済策が“ineffectual”と見做されないようにと心を砕いていたわけであるが、当のアイルランド人の反応、当時の新聞の捉え方、ゴドウィンへの叱責にも似た批難、シェリー自身理論の敷衍を詩の世界に切り換えたことなどから推して、やはり“ineffectual”であったと肯首すべきだろうか。

実は、シェリーが人類の自由、幸福、平和の実現を願って事細かにアイルランド人に示した実践方法のいくつかは、今日の心ある人たちが口にしてしているものなのである。とは言うものの、ベルタランフィやアーサー・ケストラが、人類の進歩とは純粹に知的な事柄、即ち科学技術のみに限られ、倫理的側面にはあまり進歩は認められない、と言っている所からすれば手放しに喜んでばかりもおれない。つまり、環境支配のために向けられた人間の知力（合理的な思考、科学技術）と、家族、国家、種全体の調和関係を維持する能力（感情に縛られた不合理な信念、倫理）のアンバランスのために、前者の発展はあっても、後者の自らの行為を改善していこうという本能的側面での発展はないので、宗教の創始者や人類の偉大な指導者たちが何世紀にもわたって説き続けてきた倫理的訓戒は効を奏したためしがない、と言う見解である。

ゴルバチョフ書記長は就任間もなく、ペレストロイカの究極目標である経済改革の手始めとして禁酒を持ち出した。南チロル愛国者連盟を設立したエバ・クロッツさんは、「暴力では何も解決できない。合法的闘争こそ幅広い支持を得られるのです」と言う。おおらかさとルーズさが渾然一体のソフト・ソサエティと呼ばれるインド初の婦人警官、キラン・ベデイさんの法と規律に忠実な姿勢が社会との軋轢を来すと懸念した内務省は、彼女を大蔵省出向にしまったが、「インドの社会に蔓延しているワイロも、国民が十分な教育を受けられるように私たちが努力し、みんなが誠実さとか真実を認識するようにな

れば、次第になくなっていくでしょう」と彼女は言う。

ワイロと言えば、シェリーのアイルランド人への呼び掛けの結びの言葉が、「あなたがたの心が清らかさと自由を奉じる社となりますように、そして邪悪な富の神であるマモン神をあがめる煙がその敬虔な心の汚れない祭壇から決して立ち上ることのないようにと祈っています」であったことを思い出して戴きたい。ノ・テウ韓国新大統領は、指導者が国民から信頼されたいなら「きれいな政治」を実践しなければならぬと言ひ、任期中、ピター文も財産を殖やさないと誓約している。家族や親類も徹底的に管理する、と。選挙時の資産公開制度が必要とならざるを得ない現状もリクルート疑惑での政治家と株との結び付きもすべて人間の持つ心の弱さから来ている。アイルランド人への駄目押しの言葉がある邪悪な富の神へのものであったということは、シェリーが人間の心の内をよく見抜いて、実に的確な指摘をしていたということになる。

第19回全ソ党協議会で、ペレストロイカ論議の他に自前の民主主義を提示したゴルバチョフは、「民主主義は寛容と忍耐がつきものだ」と一部代議員に語ったという。フランス文学者、渡辺一夫氏は、「不寛容に報いるに不寛容をもってした結果、双方の人間が逆上し、狂乱し、怨恨や猜疑が人の心に深いヒダを残して、対立の激化を長引かせる。それより、無力かもしれないが寛容を貫くことのほうが大切」と繰り返し説いていた。

平和年の年末に核廃絶を訴え、生命を賭した死に至る断食をホワイトハウス北側の平和の広場で続けた米国の宇宙物理学者、チャールズ・ハイダー博士は、「何もしないというのは最大の罪悪だ。もしあなたが少しでも私に心を動かすなら、私の行動を多くの人に知らしめて欲しい。議会に、政府に手紙を書いて欲しい。そして一日でも二日でもいいから

テレビもラジオもつけず、レコードもかけず、読書と思索にあなたの時間を使って欲しい。そうすればいつかあなたは私の隣に座って私の非暴力平和運動を支援してくれるに違いない。私の死が人民の平和のなだれを生むなら償って余りあるだろう」と言う。母国ポーランドを訪れたローマ法王、ヨハネ・パウロ二世はバルト海沿岸のグジニア市での説教で言う、「我々は軍隊の命令で押されたからといって、決して前進することはできない。社会的連帯の名のもとですべての人間の権利が尊重されなければ、いかなる進歩もありえない。……他者を悪や敵として扱う闘争はあってはならない。それは破滅をもたらすのみだ。しかし、人間の存在と権利のため、自らの真の進歩のための闘争は健全である。それはより成熟した生存への闘争だ。真理と自由と正義と愛に支配された時、人間生活は“より人間的”なものとなる」と。

以上ほんの数例見ただけでも、シェリーの名こそ出てこないが、シェリーの主張と寸分変わらないではないか。

ベルタランフィとケストラーに立ち戻ると、人類の知的進歩と倫理面での進歩のアンバランスは、人間の脳が内臓する理性と情緒の精神的分離のためであるとする。神経生理学者はこれを生理機能分裂とし、生物学者は「進化の手ぬかり」とし、カフカは人間の苦悩の象徴と見做した、とケストラーは述べている。

このように、倫理面で完全になろうと努力しても完全になり切れない人間の苦悩にもかかわらず、ケストラーも、何人かの偉大な人たちが人間らしい調和のとれた最高の倫理を生み出してきたという事実は認めている。生命科学への新しいアプローチをもとにして人類の状況がもっと正しく診断されて、知的進歩が生み出す何らかの治療法によって、新皮質（理性）が古い脳（情緒）の愚行に対し拒否権を持つようになり、進化のひどい過ちが修正され、情緒は理性と和解する時が来るか

も知れないとケストラーは言うが、現時点では全人類を均一に倫理面で改善させるのは、その手段が“effectual”かどうかの問題ではなくて、どんな手段をもってしても完全には出来ないということになる。

こうなってくると、未だにアイルランドの政情が解決していないことからしても、あの時シェリーが示した救済策自体も“ineffectual”であったのではなくて、ケストラーも言うように、詩人は直観力を持った優れた医者なのだから、シェリーも何人かの偉大な人たちの端っくれとして民衆に何歩も先んじて、彼らに治療を施そうとして、「自己変革」という処方箋を示したのだが、治癒する病気ではなかったということになる。

シェリーは現代の神経生理学者たちの言う脳の欠陥について知る由もないが、彼は人間のことをよく知っていたと言わねばならない。シェリーが言ったのは、揺り籠にいる時から自由について語らせ、「節制」「規則正しさ」「思考」を習慣づけるということであった。脳の器質的な欠陥であろうと、何人かの優れた人たちがそれを克服している以上、それを習慣によってある程度まで乗り越えられないわけがない。

第三の治療法、第三の波といった言葉をよく耳にする。前者は医学での精神的ケアであり、既にホスピスなどで実施されている。第三の波とは、米国の未来学者、アルビン・トフラーが唱えるもので、情報化を軸に人間の復権を図る新しい社会のことである。因みに、第一の波は農業社会、第二の波は産業社会で、日本を第二の波の勝者としている。トフラーの言う人間の復権の理論については全く知らないが、現状が情報化社会の渦中にあることは紛れもない事実である。大手情報産業が早くも過ちを犯し政治家を巻き込んだ。情報社会に於ては、人、自然、物との具体的なコミュニケーションは抽象化されたシンボルの操作に取って代わられる。すべてが記号と数字

としてのお金に還元される。こうした情報システムの発達で、情報の発信源となる人間を振り回し、自律性の喪失を生み出している。飽食と情報の洪水の中で人は自分を見失い、人間としての本来あるべき姿をどんどんと失っていく。かくして外面的にすべてが飽食状態となり、心の中に大きな穴がぼっかりと開いた時、人は初めてこれではいけないと考え始めるに違いない。置き去りにされた心をもう一度取り戻そうという動きが起こるに違いない。

しっかりと人間を見つめて、人間のために人間の心の究極的、徹底的な「自己変革」を目指したシェリーの改善理論が“effectual”なものとして浮上して来るのはそんな時ではないだろうか。神経生理学者に対しては「習慣」で対処し、空想的、革命的、現実的といった表現を超越したゆるぎない真理と正義に考え方の基礎を置き、柔和と寛容と人類愛を手段とし、全人類の自由、幸福、平和を目的とする真に人間を人間として愛した人間シェリーの考え方が人々に受け入れられないわけがない。たとえシェリーの名前が出ることがなくても、先に見てきたように同じ考え方が多くの人々によって口にされれば、シェリーが受け入れられたと同じことになる。時代を越えて、心ある人々なら誰でも口にできる理想であって、これがためにシェリーを“ineffectual”であると決めつけることがいかに不当であるかは、以上述べてきた通りである。人間がこうむる「進化の手ぬかり」に起因して、自らの行為を改善していこうという本能的側面での発展が人間にないためにシェリーのせつかくの実践方法も“ineffectual”であるとするのは肯首できる。(10月10日受理)

樟蔭東女子短期大学講師